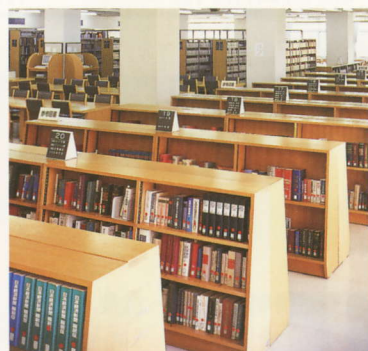




総合政策学部教授
竹市良成

私が人生で初めて図書館と出会ったのは、私の家の近くにあった白金児童館の図書室です。今から半世紀以上も前の事でした。当時の町の様子は戦後の混乱期にあり、ほとんどの家が木造で屋根はトタン貼りが多く、そんな中で鉄骨の4階建ての児童館は、私達子どもに威風堂々とした感じを与え、自分の家にはない安定感があり、どこか異文化の臭いさえ感じていた。この3階（2階だったかも）に図書室があり、ここには色々な本があり、この本を夢中になって読んだ思い出があります。この時代、子ども向けの本は、ほとんど個人の家で購入できるほど裕福ではなく、ここで本を見たり、読んだりすることが、なにか贅沢な事をしたように思いました。

この児童館から更に北へ2kmほど歩くと、鶴舞図書館があり、ここには中学生になってから大学卒業までよく通い利用しました。閲覧室は静寂がただよい、緊張した雰囲気か快いものであった事を覚えております。読みたい本がすぐを買うことのできない私共には図書館は、あれも、これも読んでみたい本で一杯の宝の山のように思える場所でした。

大学時代での図書館の思い出で一番印象深いものは国立国会図書館でした。卒論で使う資料がここでしか見つからず、田舎者が上京するだけでも大変興奮するのに、国会図書館に入ってその圧倒的な蔵書量と、そこを利用している人々の態度に堂々としたものを感じ、一泊して二日間必死に資料をノートに写し、充たされた気持をみやげに名古屋に帰って、それを卒論に使ったことは一生の思い出となりました。

今、大学の教員となって30数年を経て、私共の大学の学生に「学校経営と学校図書館」の講義を教職担当者として行っており、その講義の中心テーマは「いかに子ども達が本好きになるか」です。文字を通して人が心の中に描くその広がりの大切さを学生に伝え、やがて彼らが子どもたちに読書の楽しさを伝えてくれることを期待して講義とディスカッションを組み合わせせてやっております。発達したメディアを通じてのコミュニケーションではない、やや原始的とも言える文字を通じてイメージを拡げることのすばらしさを熱く議論をしています。

机に向かわなくても、寝っころがってでも本を楽しむ、子どもが一人でも多く育ってくれることを願っております。